



日本文学全集 46



五味川純平

人間の條件 (上)



河出書房

日本文学全集 46 五味川純平



© 1973

責任編集

武者小路実篤・川端康成
石坂洋次郎・山本健吉
瀬沼茂樹

昭和42年11月25日 初版発行
昭和48年10月30日 10版発行

著	者	五味川純平
発	行	者 中島隆之
印	刷	者 草刈龍平
装	幀	原 弘
印	刷	・中央精版印刷株式会社
製	本	・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六
電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

まえがき

..... 五

第一部

..... 七

第二部

..... 一七

回想的略歴

五味川純平 三一

作家の横顔

石堂清倫 三三

人
間
の
條
件
(上)

ま え が き

或る局面での人間の條件を見究めたいという途方もない企みを私はした。大それたことだとは、手をつける前からわかっていたが、あの戦争の期間を、間接的にもせよ結局は協力という形で過ごして来た大多数の人々が、今日の歴史を作ったのだから、私は私なりの角度から、もう一度その中へ潜り直して出て来なければ、前へ進めないような気がした。書き終ってみて、果して出て来られたかどうかは怪しいものだが、この一年間、作中の人物と共にあの数年間を暗中摸索した^{あんちゆくもさく}ことだけは事実である。そしてまた、人間が生きて行く條件を、あとになって整理したり修正したりしても、失われた日々は遂に甦^{よみがえ}らないということも、悲しい事実である。

『人間の條件』という題名は、アンドレ・マルロオの作品に同名のものがあるので、随分気になったが、他につけようがなかった。

これは勿論フィクションである。梶をはじめ、人物は実在しない。いつの時代でもそうだが、歴史の事実はフィクションよりも遙かに複雑で、ドラマチックである。それはそのわけなのだ、無数の人間が長い時間をかけて織り成す壮大な社

会劇なのだから。そういう歴史を前にしては、虚構という手法に拠らなければ、とても真実の門口に近づくことが出来るものではない。

物語の時を戦争のさ中に置いたけれども、歴史がもしなんらかの程度に繰返されるものならば、われわれ戦中派が味わった苦汁は、戦後派の人々とも無縁ではないかもしれない。何故と云って、われわれが前の世代の遺産としてあの戦争を苦痛と絶望の中で背負った事実があるにもかかわらず、いままた怖ろしい遺産相続の遺言がなされようとしているかに見受けられるからである。多少でもそういう共感が得られるとすれば、作者の願望は殆ど剩すところなく果される。

ところで、何を書くにしても、それが物語であるならば、面白くなければならない、という観念から私は離れられない——面白く書けたかどうかは別として——。私がここで云う面白さは、練達の文学者達からは「通俗」だと誹謗されそうな面白さである。もし大衆の健康な欲望が求め、親しみ易いと感じる面白さがあるところにあるのだとしたら、私はそれを探したい。それが追従主義になるかならないかは、面白さのせいではなくて、主題の質の問題である。私はせいで面白く書こうとした。それにもかかわらず、随所に晦渋で生硬なところがあるらしい。力量不足で、大それた仕事が所詮手に負えなかったのである。

一九五六年七月十一日

五味川純平

第一部

1

いつまで歩いてもきりが無い。そうしたものだ、二人連れで歩く道は。とりとめなく語り合ったが、肝腎なことは触れていない。触れたいくせに、互に避けている。

棉のような雪が宵闇の迫る中を静かに舞い降りていた。寒くはなかった。満洲では、こういう雪は珍しい。たいていが砂のようにサラサラとして、吹きつけられて肌をさす。それが、いまは、ふんわりと柔かく包むようである。

町角で二人は立ち停った。人通りは少かった。雪でふちどられはじめた窓々に灯が暖かく瞬いていた。ここから先き、道が二つに分れている。

「あたし、もう、行きましようか？」

美千子が心とは反対のことを言った。

梶は美千子の肩越しに、角の家具店の飾窓を見てい

た。美千子は梶の視線の先きに、壁掛の皿を見た。ロダンの《ペーゼ》の模写を焼付けたのであろう。裸形の男女が犇と抱き合っていた。

梶の視線がそこから外れて、宙に迷った。美千子がそれを捉えた。

「あなたらしくないわ」

「何故——」

「逃げているんですもの」

男の眸が灯を受けて強く光った。それが据って、注がれると、女は胸が迫って切なくなった。

「あたし、納得出来ないの。いくら戦争だからって、愛しているのに結婚しない方がいいなんて」

「……しない方がいいと思うんだ」

「どうして？」

「僕にだってほんとうのことはわからないよ」

梶はまた壁掛の皿を見た。美千子は梶の外套の幅広い肩に積った雪を撫でて、その襟をそっと握った。

「欲しくないの？……あたしを」

「欲しいよ——」

これは激しかった。青年の欲望がほとばしるようであった。

「あたしも欲しいわ。……だのに、どうして結婚出来ないんでしょ」

「何度云ったらわかってくれるんだ」

「知らない！……聞きたくないわ」

と、かぶりを振った。頭巾に積った雪が舞い落ちた。「いつ赤紙が来るかわからない、明日来るかもしれない、そうおっしゃるんでしょ？ 聞きたくないの、そんなこと。あたしは平凡な女です。好きな人と結婚する。それ以外の幸福なんて考えられないの。結婚して、その翌日に赤紙が来たって、あたし後悔なんかしやしない。そりゃ、泣くわ。きつと、死にそうなほど泣くわ。でも、それ以上の幸福なんてどうしても考えられない」

男は喜んだ。誇らしかった。そして当惑した。赤紙か白紙か、必ず来るだろう。それも近いうちに。行けば、還れないものと、悲壮な感慨が先きに立つ。数理の確率では割り切れない、どうしようもない気持である。いっそのこと、欲望にまかせて幸福とおぼしいものにむしゃぶりつくか。束の間の、明日も知れぬものであっても、女は覚悟しているというのだ。

「じゃ、これから……」

と、ためらいながら言った。

「僕の寮へ行く、僕の部屋に泊めるよ、今夜は。かまわないか？」

女の眼が一度は伏せて、それからキラと光った。

「いいわ。……行くわ！」

美千子はその方角へ踏み出した。梶は動かなかった。

「君は君の寮へ帰り給え。……来てはいけない」

美千子が立ち停って、向き直った。宵闇を隔てて、その顔が暗く歪んで見えた。

「試したのね！ 試してはいけないことを」

声が慄えていた。それが強く変った。

「怖いのか？ 模範社員の経歴に疵がつく？……あなた臆病よ。卑怯よ。……梶さんのバカ！」

美千子は別の道を走り去った。梶は黒い空を仰いだ。雪は降りしきっていた。

臆病でも卑怯でも、よかったのだ。模範社員の経歴に疵がつく？ などと言われさえしなければ。梶は愛情の痛みと憤怒を覚えた。美千子の衣服を剥ぎ取って、欲情を存分に注ぎたかった。その美しい豊かな肉体に埋没して幸福の幻想に浸りたかった。せめて、戦争を忘れたかった。あすか、あさってか、いつの日か、そこへ引き出される自分自身を。

梶はもう一度飾窓の中の掛皿を見た。裸形の男女は恍惚として抱き合っていた。戦争だからといって、何故そうしてはならないんだらう？ 彼が美千子をそうする機会は去ってしまったのかもしれない。彼は灼けつくような渴望に喘いだ。若い男の幻想の中では、幸福は、たいてい若い女の白い裸体の形をとっている。それだの

に、彼はそれを抱き寄せ、抱き締めようとしなかった。しかも、女がそれを望んだというのに。

2

五十人ほども机を並べている広い課内で、真剣に仕事をしている者は少かった。巨大な会社では、たいてい何処でもそうである。定時に出勤して退社する。その間の時間を要領よく空費すれば、生活が一応保証されるのだ。植民地の会社では殊にその傾向が著しい。

暖房がよくきいて、室内は暑かった。みんな上衣を脱いで、袖覆輪そでふくりんをつけて、机についているが、無駄話をしたり、会社用箋せんで手紙を書いたり、電話で長話をしたりしている。煙草の煙があちこちから盛んに立ち昇る。妙に喉を刺激するような匂いがするのは、煙草の配給量が切れて、地場の安煙草をあさるせいである。

梶のテーブルに属する中年の准職員が隣りの同僚に云った。

「スターリンググラーードでドイツ軍が参るとは思わなかったよ。こうなると、もうドイツもあまり当てにはならないね」

「これからソ連がどう出て来るかだよ、問題は」

笑いながらだが、日ごろの懸念けんねんが正直に出ていた。満洲には太平洋はない。だから対米戦争の実感じかんは稀薄であ

る。満洲には幾々えんえんとして長いソ満国境がある。だから、ソ連がどう出るか？ この方がよほどに切実なのだ。

「心配ない」

と云ったのは、向い側の机の若い准職員である。

「満洲には《関特演》以来関東軍がデンと構えているよ。ピリッともすることじゃないさ」

大きな声でそう云って、梶の方をチラと睨み見た。梶は、黙って、調査報告を書いていた。《出銃に及ぼす生産諸力の影響》と標題がついている。

「関東軍には大西兵長がデンと構えているからね」

と相手が云うと、若い准職員の予備役兵長は得意そうに「そうや、そうや」と笑った。山西作戦で蛮勇ばんゆうを振るったことが、この若い男の生涯の自慢となるに違いない。

「しかし、どうしてやらなかったんだらうか？」

と、梶の直ぐそばにいる年嵩としかさの職員が話の方へ顔を向けた。

「ドイツが破竹の勢で進撃したときに、日本がシベリアへ出兵して挟み討ちすれば簡単だったじゃないか。それこそ関特演以来関東軍にはそれだけの實力があるんだから」

話はそこでちょっと途切れた。南北両面作戦をやるだけの實力が日本にはない、ということだけがおぼろげな

がらみなにわかつている。しかし、そうやれば早く勝て
 そうなものだし、赤の脅威を簡単に取り除けそうなもの
 ではないか、という気はするのだ。昭和十六年夏の関東
 軍特別大演習、略して関特演と称する大動員が何の目的
 で行われたか、一介のサラリーマン風情にわからう筈は
 なかった。日本はドイツがロシアに勝つと信じたのだ。
 むしろ、あまりに早く勝つことを怖れたと云ってもしよ
 い。ドイツ軍がロシア全土を疾風の如くに席捲して、そ
 の驚異的な勢力とソ満国境で対峙するような結果となる
 かもしれぬことを。

梶は黙って書いていた。シベリア出兵をしてくれな
 ったことは倖せであった。もし出兵が行われていたら、
 梶などという青年は生きてはいなかっただろう。

「南太平洋ではどうなんだろうね？」

と、別の事務員が小声で云った。

「ほんとうのところ、ガダルカナルから転進したとい
 うのは……」

惨敗したということだ。梶は書きながら肚の中でそう
 云った。全滅を辛うじて免がれたということだ。ただそ
 れだけのことだ。

「戦略的撤退だよ」

大西がまた大きな声で断定的に言った。

「アメリカの奴、やっと取ったと思ったら空ッぽの島だ

ったというわけだ。その間に日本軍はもっと有利な地点
 から攻撃するんだ。見とってみい」

と、梶の方を、今度はこれでもかというふうに見た。
 梶は眼を上げた。好戦的な男と反戦的な男、従ってウマ
 の合う筈のない二人の視線が絡み合ったが、梶は直ぐに
 そらした。入口の方から、梶へ向って笑いながら机の間
 を縫って来る男が見えたのである。

「恪勤精励だ、相変らず」

その男、影山は、近づくなりそうからかった。太い眉
 の、いかにもごつい感じの男が、なんとなく親しみ易く
 思わせるのは、齒並が白く清潔なせいだろう。

「出銃に及ぼす生産諸力の影響、か」

と、影山は報告書の表紙を指ではじいて、ニッと笑っ
 た。

「どうだ、梶。恋愛に及ぼす戦争諸力の影響、という奴
 を書いてみんか？」

美千子のことだな？ 梶の気持は甘酸っぱくなった。

三日口をきいていない。美千子はこの上の部屋、タイブ
 室にいる。部厚いコンクリートの天井が梶から美千子を
 さえぎっている。梶は天井を見たかった。反対に顎を引
 いて、言った。

「何の用だ？」

「別れに来たんだ。ちょっとばかりセンチだがね」

「そうか、とうとう来たか。梶は殆ど口の中で云った。」

「……発つのはいつだ？」

明日の朝だ、と、影山は濃い頭髪を撫でた。これはあと数時間で彼の頭から切り落される。今後数年間、或は永久に、いまの形には戻らないかもしれない。

「俺はチンピラの時代に兵隊ごっこはいつも大將だったからね、オトナの兵隊ごっこでもどうにかなるだろう」

「明日とはな……」

梶は自分のことのように気が滅入った。

「ゆっくり話をする間もない」

「五日前に来たんだがね、毎晩一人で呑み歩いていた。最後に君を思い出したというわけだ。ところで、どうするんだ？」

と、影山が拇指を立てて、天井をさした。その上を、いま、美千子が歩いているかもしれない。梶は再び甘酸っぱい気持を味わった。今度のは重苦しいだけいけなかった。

「君は明日行く。あさって僕が行かないと、誰が保証する？」

「行っても死ぬとは限るまい。俺は生来オブティミストだからこう云うんだがね。入社以来の四年間というものは、俺は君と違って、徹底的にサボって呑み歩いた。遊ぶことと思ひ残しはない。その俺が後悔していることが

あるとすればだ、ただ一つ、好きな女をこしらえて、結婚しておかなかったことだ。その女房の腹に俺の生命の一滴を射ち込んで、命中させておかなかったことだ」

あたりの事務員達が話の露骨さを面白がって笑った。

梶は美千子を妄想した。悩ましく息づまる思いがした。

「これは、梶、むずかしく云うと、庶民的エネルギーの具現という奴か。未来を無條件に信ずるといふ、な？」

「俺も、そのときにはそう思うかもしれない。しかし、オブティミストにはなりきれないからね」

すると、影山が、ふいに小声になった。

「どうだろう、いつまで続くかな？」

梶は相手の珍しく真剣な顔つきをじっと見た。戦争の先きが短いにしたところで、この男の生還の保証にはならないのだ。だが、少くとも、気休めにはなる。

「……長くはないね」

「……三年か……？」

「さあ……」

梶は煙草の端を机で叩いて、自分のテーブルを見渡した。みな聞かないようなふりをして聞いていた。戦時下に人前で、しかも軍需会社のようなところで、悲観的な観測を述べることは危険であった。だが云いたかった。予備役兵長大西准職員が横眼で梶を見ていた。彼は山西作戦の猛者だ。支那の女を強姦することがいかに娛しむ

であつたか。人間の後頭部に銃口を押しつけて発射すると、いかに人間は簡単に「コロリン」と死ぬものであるか。それが、彼の戦争知識の体系なのだ。かまうものか。云つてやれ。どうせ今度は俺が征く番だ。梶は云う氣になった。

「真珠湾をやったときにね、俺はこう云つて上役から大目玉を喰つた。米国の戦艦二十隻を撃沈しても、こちらが戦艦一隻を失えば少しも勝つたことにならない。日本はとんでもない歴史の一頁を書いてしまった、とね」

そう云いながら視線をやると、離れた窓ぎわの机から、主任が口を尖らせて眼鏡越しにこちらを見ていた。

「単純な算術なんだ。鉄鋼生産一億噸と五百万噸の比率でね。そりゃ、戦闘力の方程式はまた別だろうが、基礎的な戦力の数字がそうなんだよ。鉄はまだいい方だ。石油や電力となるとその差はてんで話にならない。これで勝とうてんだから、大和魂は忙しいよ。鉄になったり、石油に化けたり、その他のあらゆる物資、あらゆる兵器にならなけりゃならんのだからね」

影山がにが笑ひした。梶は煙草に火をつけた。大西から敵意のこもつた視線が刺さつて来るのを意識した。奴は支那の老婆を機関銃で射殺する勇氣はあつても、敗北の運命を考える勇氣は持たない奴だ。

「俺は大目玉を喰つたあとで、統計を集めて計算してみ

た」

と、梶が続けた。

「その計算だと、昭和十八年の上半期に日本と満洲の鉄鋼生産高はボトムに達する筈だった。いまは三月だね。俺の計算に少しズレがあつたかして、ボトムにはまだ落ちていないらしい。しかし、そうなる運命だけは既に成熟しているんだよ」

突然、大西がガタンと椅子を鳴らした。

「梶さんは日本が負ければいいと思つてゐるんですか！」

血相が變つてゐた。部屋の半分は確かにその声を聞いたに違ひない。梶は胸の動悸が激しくなつた。とんでもないことになりそうだ。うろたえたが、いまさらとぼけることも、打ち消すことも出来ない。

「僕がそう云つたかね？ 何を君はだしねけに怒り出すんだ？ 僕は数字の話をしているんだよ。その数字の意味するところが、戦争をしない方がよかつたということなんだ」

「数字なんかどうでもいい！ 日本は戦争してゐるんだ！」

今度は部屋全体がその声を聞いた。大西は退くに退けなくなつて、立ち上つた。

「あんた達が角帽をかぶつて喫チャ店に入りびたつてい

たときに、我々は山西の山奥で戦闘していたんだ。その苦勞がわかるかね！ あんたみたいな敗戦思想の学生を養うためじゃない！」

大西は逆上して、どす黒く気色ばんだ顔を振り立てて、あたりを睨めつけた。

「これだから俺はインテリって奴は嫌いなんだ！ 在郷軍人の銃剣術の演練となると女みたいに逃げ廻りやがって、理窟だけはこね廻しやがる。そんな奴はと……」

吃って、大西の怒号は中断した。そのために、彼の怒りがいかにも正当らしく見えた。室内は静まり返っていた。影山がにが笑いを洩らした。梶は蒼ざめた。生意気な！ こいつは俺の部下ではないか！

「あわてずに云えよ。非国民と云ったらどうだい！」
彼は火をつけたばかりの煙草を床に叩きつけた。

「君はなるほど歴戦の勇士で、金筋一本の陸軍兵長だ。僕は無等兵だ。しかしね。大西君、はっきりさせておくが、ここは軍隊ではない。そして僕は君のテーブルマスタ―だ。口が過ぎやしないか」

そう云いつつ、梶は、自分のよく張った肩や腕の筋肉に緊迫感が漲って来るのを味わった。スポーツのとき以外には、ついぞ覚えのないことである。

「君は銃剣術をひけらかしているようだがね。僕は君の訓練を受けなかったって、君の上臈でも下臈でも取るくら

いの自信はあるんだよ」

「勝負あった。それまで」

と、影山がこともなげに銃剣術の審判の手真似をして見せたので、囲りの者の緊張がようやく弛んだ。

「どうしたんだ、大きな声で」

と、主任が寄って来た。

「執務時間中だよ」

梶は新しい煙草を盛んに机で叩いていた。この出来事は勤務成績にかかわるだろう。ポーナスに響くだろう。大西は愛国者だから、点がつくかもしれない。梶は非国民だからブラックリストに載るだろう。いや、真珠湾の日以来、危険人物として人事課の秘密帳簿に載っている筈だ。勝手にしやがれ！ 俺の仕事を誰か他の奴にやらせてみるがいい。

「梶君、少し場所柄を考えないか。君の知識が大体において正確なことは、君の仕事が証明しているが」

と、主任が口を尖らせて云った。

「しかしね、インテリの役割というものは正確な知識を仕事に導入するだけではないだろう？ 特に現在のような非常時においてはだよ。君のように知識を悲観的に用いると反国家的になる。樂觀論を正当化するために使用するべきじゃないかね？ それがインテリの愛国心というものだと思ふんだが」

梶は冷やかな反抗的な視線を主任の口のあたりに据えていた。

「主任さん、電話です」

と云う女事務員の声で、主任は机へ引返して行った。

梶は大西を眼で追った。大西は部屋の間で茶を汲み、一口呑んで床にぶちまいた。決して視線を合せようとしていない。どうだ、大西、防具をつけないで銃剣術の一本勝負をやるか、戦時下に最もふさわしい、最も愚劣な決闘ではないか。梶はうんざりして、笑った。そのとたんに視線が合った。やるか！

主任が戻って来た。

「梶君、採鉱部長が呼びだ」

梶は焦点のぼやけた表情をした。

「君の書いた『老虎嶺レポ』の説明じゃないかな」

主任はつとめておだやかに云った。梶は注意を要する人物だ。しかし、便利な男でもある。どんな調査でも一応こなしてみせる。他人の調査事項をつぎはぎして小器用に報告書を纏め上げる男は多勢いるが、統計数字だけを見て独自の報告文を書くのはこの男くらいなものである。

「大西君には僕から話をしておくから、君は直ぐに行つて来給え」

「承知しました」

梶は立って、影山の顔を見て苦笑した。

「君の出発前のちょいとした活劇だったな」

二人はドアの方へ、椅子の間を分けて行った。

「俺が題名をつけてやろうか。百パーセント愛国者と非国民はどうか？」

梶は大西の方へふり返った。大西は主任の前に昂然と立っていた。主任が笑顔で何か云っていた。梶君はああいう男なんだよ。気にしてはいけない。君の云うことは勿論正しいんだよ。僕から梶君によく話をしておくから。そう云っているのだろう。おめでたい愛国者のテンブラ野郎共！

ドアのところで、二人は夜の再会を約して別れた。

コンクリートの廊下が重役室のあたりでは立派な大理石に変っている。梶はそこでタイピストの中沢靖子に出会った。靖子は浅黒い引締った顔を綻ばせて会釈をした。ものを云いたそうに見えた。梶はまだ興奮が冷めきっていないかった。美千子さんどうしている？ 僕のと、怒ってやしないか？ そう訊きたいのが、硬ばった会釈になった。

靖子は廊下の曲り角でふり返った。梶は採鉱部長室のドアをノックしていた。